

六厩産廃処分場対策委員会だより



発行：六厩産廃処分場計画対策委員会

◎六厩で環境影響評価関連調査（現地調査）が始まる

前は、環境アセスメントの調査が1月から始まったことをお知らせしましたが、環境影響評価関連の調査として、㈱アルト（調査会社：ユーロフィン日本環境㈱（神奈川県））が、環境影響評価関連の調査として六厩川の魚類・底生生物及び植物の調査を4月22日～24日及び5月27日～30日にかけて調査します。

ユーロフィン日本環境㈱は、魚類調査等のほか、大気、水質、地下水、土壌、騒音、振動、悪臭、廃棄物、温室効果ガス、動物、植物、生態系等の調査が予定されています。

調査中は、調査員は身分が分かるよう腕章の着用・看板等の設置をするよう指導しています。

調査期間中は産廃処分場計画対策委員会と庄川漁業協同組合が注視します。

環境影響評価関連の調査は、次の事業者へも委託されています。

- ・㈱環境地質（神奈川県） 地形・地質・地盤を専門に調査
- ・㈱地質工学社（埼玉県） 調査全体を総括

※調査について詳しくは、㈱アルトホームページ「六厩クリーンセンター最終処分場整備事業（仮称）環境影響評価方法書及び方法書」(https://alt-mizuhashi.com/document/method_book/)をご覧ください。

◎㈱日本自然発酵を訪問し、今後の対応について協議しました。

1月31日（金）に㈱日本自然発酵^{うどやま}荘川研究所へ訪問し、濁活山^{うどやま}所長と今後の協力体制（会社としての対応、のぼり旗の設置についてなど）について話し合いを行いました。

今後は、㈱日本自然発酵本社も含めての協力体制を構築できるよう、継続的に協議の場を設けて努力をしていきたいと考えています。

◎高山市のホームページに六厩産廃処分場計画について掲載されました。

3月3日（月）高山市のホームページに「六厩クリーンセンター最終処分場整備事業（仮称）について」が掲載されました。

事業概要等わかりやすく掲載されていますので、ご覧ください。

(<https://www.city.takayama.lg.jp/kurashi/1000024/1000128/1021488.html>)

また、ホームページには、高山市の意見として、以下のように記載されています。

『市では、事業予定地が非常に寒く積雪の多い地域で水源や別荘地のすぐ上流であること、活断層に近接していること、水質・動植物・魚類・自然景観への影響や盛土の安全性、庄川下流の白川村や富山県の受益者への影響など多岐にわたる懸念や課題があることから、「最終処分場の建設地として適地ではない」と考えています。また、県から市への意見照会に対し、市ではこれらの懸念や課題などについて意見書を提出しています。』

今後も地域の皆さまの不安や懸念事項を真摯に受け止め、いただいたご意見を許可権者である県に伝えながら、地域並びに市民の皆さまに寄り添った対応をしてまいります。』

昨年11月に田中市長の現場視察後、市民をはじめ、多くの方の目に触れる市のホームページに掲載していただいたことに感謝いたします。また、今後も状況に変化がある場合は、市民への的確な周知をぜひお願いしたいものです。

◎市議会特別委員会が先進地視察を行いました。

高山市議会の産業廃棄物最終処分場計画調査特別委員会（委員長 中箴議員、副委員長 平戸議員）は、今月、産業廃棄物最終処分場問題で様々な取り組みをしている愛知県西尾市を視察されました。

視察結果報告については、後日報告されるそうです。

西尾市は、市長が処分場建設反対を強く表明され、各種委員会・研究会などへの諮問にも市の予算を配分し対応されるなど公平中立の立場の行政が産廃処分場問題に取り組まれ、署名活動やチラシ配布、講演会、街頭啓発など、市民団体も精力的に活動。漁業協同組合も県に働きかけるなど官民が一体となって活動されているところです。

処分場計画は、粘り強い反対運動により「白紙撤回」とまではなってないようですが、産廃業者は事業計画の見直しとなったと聞いている地域です。

行政と地域住民が産廃問題を戦うための方向性を学ばれた特別委員会の皆様の報告を含めた勉強会を計画し、当対策委員会も活動を進めていきたいと思っています。

◎4月19日（土）中日新聞社社説で次の記事が掲載されました。

岐阜県高山市の山間地で、産業廃棄物の管理型最終処分場を建設する計画が進み、地元からは環境への影響などを理由に反対の声が上がる。処分場は現代社会に不可欠な施設だが、埋め立てられた廃棄物への懸念は処分の終了後も残る。将来に禍根を残さないよう、施設の設置に許認可権を持つ県には、慎重な審査を求めたい。

建設を計画するのは、富山市の廃棄物処理会社「アルト」。高山市の荘川町六厩（むまや）地区で、約11万平方メートルの用地に金属くずやアスベスト（石綿）、ダイオキシン、水銀などを、26年間埋め立てる。すでに県に事業計画を提出し、住民への説明会も開いた。

これに対し田中明・高山市長は2022年、「風評被害の発生など多くの課題がある現状で、適地ではない」と市議会で表明。市議会も昨年、県に設置を許可しないよう求める意見書を可決した。意見書は、予定地では県が震度6強の地震を想定するのに、設計上の震度が低い▽地下水を含む水源への影響について十分な調査が行われていないーなどとして「設置に断固反対」とした。

反対の論拠の一つは、予定地が岐阜県から富山県へ流れる庄川の支流・六厩川の上流にあることだ＝地図。砺波平野など河口までの広い流域で飲み水や農業用水となるため、住民や農家たちは有害物質の流出を強く恐れている。

企業側は、廃棄物に触れた水は「遮水工」と呼ばれる仕切りによって地下に浸透せず処理施設に送られ、自然界の水に近い状態で放流されると説明するが、六厩は本州有数の寒冷地で、冬の最低気温は氷点下20度以下になることもある。長年にわたり、地盤が凍結と融解を繰り返す中で設備の機能は想定通り維持できるか、といった住民らの懸念は拭えていない。

岐阜県ではかつて、飛騨市の神岡鉱山からカドミウムを含む水が神通川に流出。富山県内で四大公害病の一つ「イタイイタイ病」を引き起こし、農地を汚染した。

その重い教訓を踏まえて、県は市や住民らが指摘する計画の問題点を精査し、住民も企業側も納得できる判断を下してほしい。